
月の無い夜に

月原 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の無い夜に

【Nコード】

N9331F

【作者名】

月原 翔

【あらすじ】

月の無い、新月の夜にのみライブを行うバンド「noom^{ノーム}」。地元ではカリスマ的人気を誇るが、なぜライブが新月の夜だけなのか、普段は何をしているのか、誰も知らない。noomの音楽に魅入られた6人の人物がnoomの素顔に迫る時、noomの意外な真実が明らかになる。

song 永遠に響き渡る音

私たちの音楽は、いつまでも永遠に響き渡ると思っていた。

小さなライブハウスの真ん中のステージに立って、私の声が、彼のギターが、みんなの心の中に響いていく。

ここでは私はSAYOと名乗って、どこまでも声が届くように歌う。

隣でKIRITOは、私の歌声の道筋を作るようにギターを奏でる。

それは2人だけのステージ。

カラフルな光の演出は、私たちには似合わない。

私たちは、決して光に照らされない存在。

新月。

月が地球の裏側に隠れて、一晩中、月が昇らない、本当に漆黒の夜。

その夜にだけ、私たちはこのライブハウスで音を奏でる。

見えないからこそ、見えるものがある。

見えないからこそ、光り輝くものがある。

見えないからこそ、私たちの音楽は響き渡る。

みんなの心の中に、永遠に響き渡る。

でも、

やがて夜が明けるように、

やがて月が満ちていくように、
やっぱり永遠なんてものはないし、あつてはいけないと思った。
ある日のライブのときに、高校の制服を着た女の子からこう言われたときに、やっと気づいた。

「どうしてあなたたちは、ここで歌い続けているの？ここでずっと歌い続けていくつもりなの？」

私たちの名前は、noom^{ノーム}。

月の無い夜、霧が立ちこめるこの街で、

私たちの音楽は、いつまでも永遠に響き渡ると思っていた。

songer 音楽に恋した少年

初めて、音楽に恋したーそう感じた瞬間だった。

その日、僕はバンドのメンバーと些細なことから口喧嘩になった。よくある、音楽の方向性の違いってやつだった。

授業が終わって、メンバーと集まった。こいつらとは高校に入ってから知り合ったけど、音楽性でも、普通の友達としても気が合う奴らだった。

他愛もない話をした後、いままではコピーをやってきたけど、そろそろオリジナル曲もやってみようか、という話になった。

僕は基本的には賛成だった。ただメンバーがやるうとしているのがバラードだった。

僕がやりたいのは激しいロックであって、バラードではない。そこで意見が対立した。

よりによって、最初のオリジナル曲がバラード。それはどうしても譲れなかった。

バラードなんて、しょせんお涙頂戴の、薄っぺらい曲だ。もっと爆音で魂を揺さぶるような、そんな激しい曲を僕はやりたかった。そんなことを言ったら、ずいぶんと攻められた。

「なあ翼、ただ激しいだけの曲こそが、薄っぺらいと思わないか」
お前は根本的に間違っている、そう言われた気がして僕はカッとなってしまった。だったら辞めてやるよ、そんなことを言い放ってメンバーとは別れた気がする。

外に出ると、かすかに霧がかかっていた。先が見えないーまさに今の気分そのものだった。

夕方、つきあっている明日香から電話があった。どうせあいつらが僕のことを言ったに違いない。

「バンドはどうするの?」

「どうするって、やりたくないものやっただってしょうがないだろ」

「でもバラード調のギターを弾く翼くんも見てみたいけどなあ」

明日香は優しく答えてくれる。もしかしたらバンドのメンバーから頼まれているのかもしれない。だけど明日香に言われると、すこし躊躇してしまう。

「静かにギター鳴らすのってイメージが湧かないんだよなあ。そんなので観客が満足できるなんて思えないんだよ」

「ふーん……あ、そう言えばnoomのライブって今日じゃなかったっけ?」

「あ」

思い出した。今日は話し合いの後、バンドのメンバーとnoomのライブに行く決めてたんだった。

noom

地元ではカリスマ的人気を持つアマチュアバンド。ボーカルのSAYOと、ギターのKIRITOからなる、2人組ユニット。

バンドをやってる地元の人だったら誰でも知ってる。僕も名前だけは知っていた。ただ彼らもバラード中心だということを聞いていたから、さほど興味はなかった。

ただ数日前、バンドメンバーの1人が、人数分の招待チケットをもらった、せっかくだから見に行こう、と誘ってきた。

今思えばあれも、自作曲はバラードで、という伏線だったのかも。オリジナルの参考にするために見に行くつもりだったのだろうか。

電話先で、明日香が相変わらず、優しく声をかけてくる。

「どうするの?チケットもらってるんだから行ってみてもいいんじゃないの?」

確かにチケットはもう持っている。行こうと思えば行けないことはない。

「一人で？しかも聞きたくないバラードを？あいつらと会ったら気まずくないか？」

「うーん、まあ勉強がてらにさ」

「勉強、ねえ……」

「だってすごい人気なんでしょ？それだけでも行く価値あるんじゃないの？次は一ヶ月後なんだし」

「そうだ、noomのカリスマ的人気の秘密は、ライブをする日にある。」

「彼らは、月が見えない、新月の夜にしかライブをやらない。だからだいたい1ヶ月に1回だ。」

「なぜかは誰も知らない。ライブ以外、どこで何をしているのか、誰も知らない。実は超大物アーティストだという噂もあるけど、結局何も分かっていない。正体不明なところも、カリスマ性の一つなのかもしれない。」

「そのカリスマが奏でるバラード。どんな音楽なのだろう。お涙頂戴の薄っぺらい曲か、それともー」

「急に気になってきた。noomの音楽とは何だろう。」

「そうだな、とりあえず行ってみるよ、何か感じるものがあるかもしれないし」

「お、やる気になってきたじゃん。終わったら感想教えてね」

「分かったよ、それじゃあまた」

「行くだけ行ってみるか。何か分かればそれはそれで一つの収穫だし、何もなかったら、noomとは気が合わなかった、ただそれだけだと思っていた。」

そしてーそれは衝撃だった。

わずかなライトが照らすステージで奏でられるnoomの音楽。

それはふとすると消えてしまいそうな弱さ、儂さの中にも、決してぶれることのないしつかりとした芯があった。

ボーカルのSAYOは、か細い声でも心にしつかりと響く、そしてその透明な声色は、月のない夜だからこそ響き渡る強さがあった。KIRIITOの奏でるギターは、SAYOの声をどこまでも届ける乗り物のようで、優しく、しかし心強く支えている。

曲調で言えば確かにバラードだ。でもこれは、今まで聞いたどんな音楽よりも、魂を揺さぶる。耳で聴くというよりも、心の中に響く。

それに気づいたとき、僕はすっかりnoomの音楽が好きになっていた。いや、好きななんてものじゃない。これは――

これは、恋だ。

今まででも好きな音楽はあった。だけどこれは、それらを通り越した感情、衝動。恋だ。

僕は初めて、音楽に恋した。

いつの間にか、僕は最前列にまで詰め寄っていた。noomを目前で、その声を、音を聞きたかったから。

そして曲の合間に、SAYOは言った。

「ライブって言うと、どうしてもこっちから一方的に話すことが多いと思うんですけど、私たちはなるべくみんなと話をしたいな、て思ってます。毎回、何人かから質問もらって答える、ということをしています。じゃあ最初は……水色のシャツを着たあなた！」

え、僕？近くにいたスタッツらしき人からマイクを渡される。どうしよう……

「えーっと……初めて聞いたんですけど、すごいカッコよかったです。こんなに綺麗なバラードを聞いたの初めてで……感動しました。あ、質問、ですよ。じゃあ……こんなに上手でセンスもあると思っんですけど、CDデビューしたりとかって話はないんですか？」

それまで柔らかく笑っていたSAYOが、一瞬顔を曇らせた。KIRITOも、唇を噛み締めているように見えた。

「なんだろうこれは。何か言っているわけではないことでも言ってしまったのだろうか。」

わずかな沈黙を気にしたのか、KIRITOが口を開いた。

「それはよく聞かれるんだけどね、僕たちはライブじゃないと、僕たちの音は伝わらないんじゃないかなって思ってる。もちろんCD出したり、テレビに出たりすれば、もっと多くの人が聞けるんだろうけど、でもそれは……本当の自分たちの音楽とは違う気がするんだよ。」

続いてSAYOが答える。

「みんな知ってるように、私たちは新月の夜にしかライブをしないの。それは真つ暗な夜だからこそ見えるものがあるし、光り輝くものがあるし、響くものがあると思うから。新月だからこそ、そしてこのライブハウスだからこそ、私たちの音楽が一番響くの。だから、いつでもどこでも聞ける音楽……それはちょっと私たちの音楽じゃないの、やっぱり。」

うまくかわされたような気もするけど、なんだか妙に納得してしまった。しっかりとした芯があると感じたからだ。

僕みたいに、バラードだからやりたくないとか、そんな軽い気持ちで、彼らは音楽をやっていない。そんな姿勢に、僕は恋したんだと思う。

SAYOが続ける。

「でも、実は今日ね、あるレコード会社の人が見学に来てくださってるの。」

観客から声上がる。驚き、歓声、拍手。

「もちろんどう評価されるか分からないけど、私はライブで声を伝えたいの。この新月の夜に、このライブハウスで。」

「そして僕はギターを鳴らす、と。」

「そう、それがnomだから、ね。」

ライブが終わり、2人はステージから消えていった。

ふと横を見ると、昼間に喧嘩したバンドのメンバーがいた。気ま
ずい、なんて全く思わなかった。僕は近づいて行って、こう言った。

「なあ……バライドも、悪くないな」

メンバーは笑ってくれた。noomみたいな音楽を奏でてみたい、
そう心から思ったからだ。

だけど1つだけ気になることがあった。僕が質問したとき、no
omの2人が一瞬、表情を曇らせたことだ。

新月の夜にしかライブをしない。ライトアップされた表舞台には
いつさい出ない……何か事情でもあるのだろうか。

ライブハウスから外に出ると、まだ霧は残っていた。どこかしつ
くり来ない……そんな気分を表しているかのようだった。

song 霧の中の秘密

この二人の音楽はCDに出来ないアーライブを見てそう感じた。

noomのことを知ったのは、地元に住んでる友達からだった。すごいバンドがいる、有希に聴いてもらいたい、有希のレコード会社からデビューさせてよ、と。

私が勤めているのは中堅のレコード会社。各地でオーディションをやったりもするけど、口コミで評判の高いアマチュアバンドのライブに自分たちで足を運んで探し出すことも多い。原石が見つかるのは稀だけど、いろんな音楽を聴けるのは仕事をする上でいい刺激になる。

今回も友達からのお勧めということもあって、視察することにした。

私の地元、豊霧市。とよぎりし昔からよく霧が出るからそういう名前がついたらしい。地形的に霧が発生しやすいらしく、地元を離れてから、確かにこの街は霧がよく出ると思うようになった。

この日は昼過ぎに着いた。駅前で友達と待ち合わせして、昼食を食べながらnoomのことについていろいろ教えてもらった。

「有希のところからデビューしてもらいたいからね、他の友達とかにも聞いてみたんだけど……まず『noom』って名前、意味が二つあるみたいなの」

「二つ？」

「新月の夜にしかライブをやらない、てのは話したでしょ。普通の月のイメージって満月で、新月はその逆。だから英語の『moon』を逆から並べて『noom』」

「ふーん、なんとなくそれは想像ついてたけど」

「さすが有希、英語は成績よかったからね」

「いや、たぶん関係ないと思うけど……」

「まあまあ。で、もう一つ。濃い霧って書く『濃霧』。それも兼ねてみたいなの。つまりここ豊霧市で活動したい、という意味が込められているの」

「なるほどね、なかなか洒落てるじゃん」

友達は、まるで自分が褒められたからのように笑った。

次に、私が疑問に思っていたことを聞いてみた。

「noomはいつから活動を始めたかわかる？」

「新月の夜のライブを始めたのは10ヶ月くらい前みたい。いつも同じライブハウスでやってるから、そのオーナーに聞けば分かるんじゃないの」

「そのライブハウスで演奏する前は？」

「その辺はさっぱり」

友達はあっさりと言った。

「じゃあ、どうして新月の夜だけなの？」

「それもさっぱり」

「……それって重要なところじゃないの？」

「そうなんだけどさ、いつどうやって結成したのか、どうして新月の夜なのか、普段何をしてるのか、誰も知らないの。ま、そういう謎めいたところもnoomの人気の一つなわけ」

「素顔は誰も知らないってこと？」

友達は相づちを打った。

「そう。だからね、実は超大物アーティストじゃないか、なんて噂もあるほどなの。もちろん噂だけど」

「なるほど、ね……」

分かったのは、とにかく新月と豊霧市にこだわっているというのとぐらい。後は、実際に聴いてみるしかない。

ライブハウス「deep mist」。ここでnoomは、新月の夜にライブをやっている。

スカウトするときは、事前にバンドメンバーには知らせない。なるべく普段のパフォーマンスを見たいのと、逆に緊張しても困るからだ。

ただライブハウスのオーナーには、一応話はしておく。録音、録画の許可が下りれば、会社に戻ったときに報告しやすい。

オーナーである有明龍哉は少し戸惑いながらも、丁寧に対応してくれた。そしていろいろなことが分かった。

noomは10ヶ月ほど前、路上でライブしていたところを有明が見つけた。他のバンドのオープニングアクトとして抜擢した。ライブハウスで披露した日がたまたま新月の夜だった。観客の評判がよかったため、次からはワンマンライブとなった。ただ新月の夜だけというのはnoomからの提案であり、その真意については有明も知らないと言った。noomの二人が普段何をしているのかも知らないようだった。

撮影の許可については強く拒否された。音楽を聴くことに集中してほしいという有明の意向で、観客全員に撮影は禁止させているようだ。

ただ穿った見方をすれば、それこそ本当に超大物アーティストなのかもしれない、とも感じとれてしまった。

霧が立ちこめる夜、「deep mist」でnoomのライブが始まった。

ほんのわずかな照明の下で響き渡る、SAYOの透明感ある声と、KIRIITOの繊細なギター。

なるほど、確かにいい。心に響くものがある。これなら地元で有名になるのも無理はない。だけどー

この二人の音楽はCDに出来ない、そうとも感じた。

レコード会社としてアーティストを売り出すとき、その人たちの特性にあったプロモーションをしていく必要がある。CMやドラマ曲として売り出す場合が多いが、バラエティー向けな人もいる。ライブに定評があるなら他のアーティストのライブと抱き合わせて宣伝していく方法もある。最近ではケータイから売り出すことも多い。noomの場合はライブ向けのアーティストだ。それは間違いない。SAYOのMCが耳に入ってくる。

「いつでもどこでも聞ける音楽……それはちょっと私たちの音楽じゃないの」

そう、この二人の場合、CDや音楽配信といった、圧縮された音源では伝わらない何かがある。

noomの音楽はこの瞬間、この場所でないと言えない。

雑音の多いマスメディアでは、彼らの繊細な音楽を完全に伝えきれないとは思えなかった。

私が考えを張り巡らしているときに、不意に「レコード会社」という言葉がSAYOの口から出た。

「実は今日ね、あるレコード会社の人が見学に来てくださってるの。もちろんどう評価されるかわからないけど、私はライブで声を伝えたいの。この、新月の夜に、このライブハウスで」

有明から知らされたのか。でも緊張を感じさせず、かといって無理していないパフォーマンスだ。

放っておくのは惜しい。だけど……スカウトはしないことにした。

ライブ終了後、有明に会いに行った。noomに私のことを話したのかと聞くと、すまない、すっかり口をすべらせちゃってね……と笑いながら話した。

「で、どうでしたか天川さん、うちの看板アーティストnoomは

？」

私は正直に感じたことを話した。実力は文句なしだが、メディアに流すと逆に印象が薄れてしまうということ。

「なるほどね……率直な評価をありがとう」

「ところで、noomの二人は？」

「ん、ああ、もう帰ってしまったよ」

「そうですか。是非ともお話をしたかったのですが」

「ああ、それは残念でしたね。さっきのことは私から伝えておくよ」

……何か引つかかる。何かは分からない。強いて言えば、女の勘だ。

「私の方から直接、連絡を取らせていただくことはできないんですよか」

「あまりそういうのは、私はお勧めしないんですよ。またnoomに会ったときに、そのことも含めて伝えておきますから」

有明は腕を組んだ、あまり触れて欲しくないことなのだろうか、話を切り上げようとしている。ただこれ以上食らいについても教えてくれないようだし、印象を悪くするのもよくない。私は諦めることにした。

外に出ると、霧がまだ残っていた。

……有明は知っている、noomの正体を。新月の夜にライブをする理由を。それらを敢えて隠している。

おそらくそれは、noomのカリスマ性を高めるためではない。

noomの存在意義に関わる重要な秘密のような気がする。

それに、SAYOのあの声はどこかで聞いたことがある気がする。どこだろう、聞き覚えがあるのに、思い出せない。

実家に帰った私は、親との会話も早々に切り上げ、自分の部屋で仕事を再開した。バッグの中からビデオカメラを取り出す。

有明からは撮影禁止だと言われたけど、会社へ報告するには必要だ。さすがに堂々と撮るわけにはいかないが、音声くらいは録れるし、ステージもほんのわずかだが写せる。

私は再生ボタンを押した。

「・・・？」

私は画面を見て呆然とした。これが、noomの秘密なのか、と。

song〜始まりのとき

ライブハウス「deep mist」の窓からは、夕焼けとともに、針のように細い三日月が見えた。

3日ほど前、天川有希という女性が訪れてきた。自分はレコード会社の者で、noomのライブを視察したいとのことだった。

俺はライブハウスのオーナーとして対応したが、正直複雑な心境だった。聴いてほしいような、見てもらいたくないような、そしてどこまで話そうか。

結局、出会ったときのことには正直に話した。駅前でライブをしていたのを俺が見つけたこと、他のバンドのオープニングアクトでデビューさせたこと、その日がたまたま新月で、そこからnoomのライブは始まった、と。

彼女は新月の夜にしかライブをやらない理由と、普段の二人についてしつこく聞いてきたが、そこはうまくごまかすことにした。それがnoomの二人のためだからだ。

あれから10ヶ月ー忘れもしない、二人がこの「deep mist」でデビューしたときの衝撃は。

俺がたまたま駅前で二人を見かけた日は、満月がきれいに見えた夜だったのを覚えている。

彼らは人前でライブをするのは初めてだったという。たしかに緊張している感があったし、粗削りなところがあった。ただ彼らは伸びる、音を聴いてそう直感した。

聞いてみると、二人は大学生だという。ボーカルの女性は川瀬沙

夜、ギターの男性は青木霧人という名前らしい。

俺がライブハウスのオーナーで、ステージに立ってみないかと誘うと、彼らは驚いた。無理はない。

だが彼らにとってもまたとないチャンスだと思ったのだろう。オリジナル曲は少ないからすぐには出来ないと言った。

そこで二週間後、まずはオープニングアクトとして一曲だけの披露を持ちかけた。また、二人にはまだバンド名がなかったらしく、当日までに考えてくれるよう、お願いした。

二人が初めてステージに立つその日は、特に霧が濃い夜だった。ライブ前の打ち合わせのとき、沙夜が口を開いた。

「そうだと有明さん。バンド名、考えてきました」

「そうだったな。で、どんな名前でデビューするんだ？」

「『noom』です」

「ノーム？」

霧人がそばにあったパンフレットに「moon」「noom」と書き、説明を始めた。

「今日は月が出ない、新月らしいんです。一般の月のイメージとは真逆だから、逆さに並べてみました。こういう記念日って大切にしたい性格なんで」

さらに霧人は「濃霧」と書き加えた。

「あとは濃霧という意味。それはここ豊霧市で活動したいってことと、ここ『deep mist』にこれからお世話になると思うので、有明さんへの感謝の気持ちも込めて」

俺は「moon」「noom」「濃霧」と書かれた文字を見つめていた。

月の無い夜に、霧が立ちこめるこの街で、か…

「いいだろう。それじゃあ、君たちは今夜から『noom』だ。さあ君たちの初ステージだ」

そして彼らは、ステージではSAYOとKIRITOと名乗り、素晴らしい演奏をした。

二週間前に駅前で聴いた粗削りなところはなく、洗練され、繊細ながら圧倒的な存在感をもっていた。

観客はもちろん彼らの音楽を初めて聴いたはずだ。だがその音色に、誰もが魅入られていた。演奏後の拍手は、俺がこれまで聞いたどの拍手よりも大きいものだった。その後で演奏したメインの方がすっかり霞んでしまったほどだった。

二週間の間に何かきっかけとなることがあったのかもしれない。だがそんなことはどうでもいい。これから彼らをどう支援していくか、それを考えていた。

彼らは間違いなくプロの世界でも通用する。こんな小さな街の評判で終わらせたくはなかった。

ところがライブ終了後、二人からは意外な要望を聞かされた。

「新月の夜にだけライブをしたい？」

どういう意味なのか、すぐには理解できなかった。だが、本当に文字通りの意味らしい。

「わがままなのはわかってます。他のバンドのスケジュールもあるでしょうし……でも、どうしてもお願いしたいんです」

霧人が頭を下げる。

俺は頭をかかえた。ライブハウスのスケジュールなんてどうにでもなる。

問題は彼らの要望だ。新月の夜にだけ、ここでライブをしたい、それ以外の日、ここ以外の場所ではいっさいライブをしない……どういうつもりだ。

俺は思い切って、自分の考えを述べた。

「正直に言おう。君たちにはプロとして活躍してもらいたいと思ってるし、その実力もあると思ってる。CDを出して、ゆくゆくはもっと大きいステージでライブが出来るように協力するつもりなんだ」

沙夜は申し訳なさそうに言った。

「すいません、でも、えっと……事情があるんです」

「事情？」

「何て言っているのか、その……」

霧人が割って入った。

「事情はそのうち有明さんの耳に入ると思います。でも、次の新月の夜には必ず来ます。なので、ライブの予定をいれておいて下さい！」

なんだかよく分からないが、とりあえずライブをやってもらえるならそれでもいいと思った。経験を積んでから説得する、そういう可能性も考えていた。

その翌日、俺はその「事情」を知った。

どうすればいいものか、それこそ本当に頭をかかえてしまった。

こんなこと初めてだったからだ。

だが次の新月の夜、2人は確かに来た。そして、素晴らしいライブをした。

俺は決めた。それがnoomの願いならば、叶えるのが俺の役目だ。彼らの邪魔は誰にもさせない、と。

この前来たレコード会社の天川という女性はなんとか諦めてくれたようだが、気になることが一つある。

……本当に撮影してないのだろうか。

撮影は禁止だと念を押したが、相手はレコード会社の人間だ。会社に帰って他の人に聴かせることもあるだろう。

もし撮影していたら……noomの秘密がばれてしまう。そうなったら、noomは二度とここでライブができなくなってしまう。

そのとき、ドアをノックする音が響き、男が入ってきた。

「有明さん、こんにちは。朝倉です」

面倒なことがもう一つあった。「今日はどっちだ。ライブの打ち合わせか？それとも取材か？」

朝倉はおどけながら言った。「今日は出版社の人間として来ましたよ」

面倒だ。窓から外を見ると、三日月は建物の陰に隠れようとしていた。

song4 満月と新月の間に

「今日は出版社の人間として来ましたよ」僕がそう答えると、有明さんは面倒そうな顔つきをしていた。

有明さんから見て、僕は二つの顔を持っている。一つは、このライブハウスでよくライブをさせてもらっているバンドメンバーの一人。もう一つは、地元のバンドを紹介する月刊誌の記者として、だ。

その月刊誌は豊霧市周辺で売っている地域雑誌だ。地元のことには徹底した内容ゆえ、親近感が湧くせいか売れ行きはいい。僕はそのなかのコーナーのいくつかを持っているのだが、その一つが、地元で活動しているアーティストの特集だ。プロアマは問わない。自分が音楽をやっているということもあり、応援する立場で何か出来なしか、と考えて思いついたものだった。そのため、取材として「deep mist」に行くことも多い。

「次の原稿書いてきたんで、軽く目を通してもらえますか」僕は次回掲載分の原稿を有明さんに渡した。

「なあ朝倉、前にも言ったけどねえ……今回はかりはあんまり気乗りしてないんだよ」

「どうしてなんですか。いつもはヨイシヨイシヨ持ち上げて書いてくれておっしゃるのに」

「あの二人には勝手に手を出してもらいたくはないんだよ。まあ地域雑誌くらいならギリギリいいと思ったから許可したんだけどよ」

「たしかに秘蔵っ子って感じはしますよ。でもだからこそ、下手に大々的に宣伝するより、こうして口コミで広げる方がいいと思うんですよ、noomの場合は」

今回の特集アーティストは、ここ豊霧市でカリスマ的人気をもつnoomだ。満を持して送る、といってもいいくらい、自分では気合い入れて書いたものだ。

有明さんが一通り読み終わったあと、首をひねりながら言った。

「だいたいはいいんだけど……」

「けど……なんですか」

うーん、と有明さんはうなりながら言った。

「冒頭の路上ライブのやりとり、削除してくれんか」

「は？」

「個人的なつながりを活かすのは悪くないが……今回だけはカットしてくれ」

「どうして、ですか？」

「カットだ、でなきゃ載せん」

有明さんが問題にしたのは、noomの二人が初めての路上ライブをしたことだった。このとき、僕は偶然だが二人の演奏を聴いていた。そのときのやりとり、そしてライブハウスデビューのときの様子を、こう書いていた。

満月が昇る夜、僕はその二人に出会った。豊霧駅前の通り。見慣れない二人がライブを披露していた。男のギターに合わせて、女の子が歌っている。後に、男はKIRITO、女の子はSAYOと名乗り、二人はnoomとして豊霧市にその音を響かせることになる。だがこのとき、今のnoomの面影はなかったと言ってもいい。

非常にアップテンポな曲をやっており、今のバラード重視とは全く違う雰囲気だった。オリジナル曲で「new moon」というものだったが、これはこれでなかなかいいセンスを持っていると感じた。今では全く演奏しない曲だが、印象的なサビは今でも覚えてい

” new moon いそいでいない 新月の夜

new moon いないようである 昼の新月

恥ずかしがり屋な お月様 まるで私みたい
でもこれから変わっていくんだから！

I can do anything!”

しっかりと練習して経験を重ねれば、いつか化けるかもしれない
……そう感じさせるものがあつた。

そして二週間後、彼らは化けた。初めて会ったときは全く違う、
洗練され、触れると割れてしまいそうなほど繊細な、しかし聴衆の
心にダイレクトに突き刺さるその音は、僕の目指す遥か上の世界に
あつた。二人の演奏したあと、実は僕のバンドも演奏したのだが、
聴衆にはnoomの音しか残っていなかったはずだ。それほど衝撃
的だった。

その日にnoomが歌つたのは「七等星」という曲だった。人間
の目では見ることができる最も暗い星「六等星」よりもさらに暗い
星。決して目には見えないけれど、心の中で光っている、だから目
を閉じてみて……そういう曲だ。

” どうせ私は どこを探しても 見つからない存在だから

あなたの視界に 入ることはできないけれど

それでも私は 時間を飛び越えて 空間を走り抜けて

あなたの中で 光り続けるようにしよう

あなたの心の中で ”

まさに新月の夜だからこそ、響く歌であつた……

「僕が初めて路上で聴いたときと、ライブハウスで聴いたものとは
別人と言つていいほどの違いがありました。音楽性も、声も。あの
二週間の間に何があつたんですか。有明さんは知ってるんですね
？」

有明さんは腕を組んだ。この人が拒否反応を示すときの癖だ。

「そんなことは教える必要もないし、書く必要もない。今のnoomのことを書けば十分はずだ」

「しかし、そのバンドの方向性が決まる出来事があったのなら、書くべきだと思います。それとも……」

僕は思い切つて、核心を突く質問をした。

「……noomの過去に、何か知られてはいけないことでもあるのですか？」

有明さんの左の眉が動いた。逆鱗に触れたときの癖だ。

「明日までに書き直した原稿を送ってこい。メールでいい。話は終わりだ」

十日後の夜、僕は出版社の自分のデスクで、写真も入った完成原稿を眺めていた。

結局、有明さんの言われた通りに、路上ライブでのやりとりはすべて削除し、初めてのライブハウス演奏からの入りにした。

noomの過去ってなんだ？その過去と、新月の夜にしかライブをやらないことと、何か関係があるのか。

原稿をぼんやり見ていると、後ろから女性の声がかげられた。

「朝倉さん、おつかれさまです！」

「ああ、咲ちゃん、連載の打ち合わせ？」

「そうです、さつき終わったところで」

彼女は豊霧市のラジオ局でパーソナリティーをしている女子大生だ。メジャーな流行曲にこだわらない独自の選曲が、意外と中高生リスナーから評判がいい。うちの雑誌でも連載でエッセイを書いてくれている。

「それ次の特集のやつですか？」

「そう、次はnoomをやるんだ」

「noom知ってますよ。私の番組でもけっこうメールに書いてあ

ったりしますよ」

「そうなんだ……ねえ咲ちゃん、noomがライブハウスで活動する前って何か知ってる？」

「え？」

咲は不意を突かれたかのような表情をした。

「いや、知らなかったら別にいいんだ。僕もいろいろ調べてみたりはしたんだけど、何も分からなくてね」

「そうなんですか……あれ、今回の写真は『deep mist』の入り口なんですね」

そう、普段ならだいたいはメンバー写真か、CD出してるならそのジャケット写真だ。ただ今回はどうしても有明さんの許可が下りなかった。あの人はもともとライブ中の撮影は禁止させているのがポリシーで、ライブ前後でnoomに直接会うこともできなかった。だから今回の記事ではインタビューという形式がない。仕方なくライブで誰かが質問していたことの回答をnoomの発言として載せることにした。その中でも、SAYOの言葉がnoomのことを的確に表現しているように見えた。

「真っ暗な夜だからこそ見えるものがあるし、光り輝くものがあるし、響くものがあると思う。新月だからこそ、私たちの音楽が一番響く」

新月の夜だからこそ響く……か。

「咲ちゃんは、どうしてnoomは新月の夜にしかライブをやらないうと思う？」

咲は窓の外を見ながら答えた。

「本人たちが好きだからじゃないですか。普通に考えるんですけど普通に考えなかったとしたら？」

「さあ……私は普通の女子大生ですから」

アハハ、と咲は無邪気に笑った。

「あ、すいません、そろそろ私帰りますね」

「ああ、引き止めて悪かったね、おつかれさま」

咲が帰った後、僕も一仕事して帰ることにした。机の上を整理している、ICレコーダーが見つかった。

実は、前回のnoomのライブ音声をこっそり録音しておいたものだ。有明さんに見つかったら怒られる覚悟だったが、運良く見つからずに済んだ。原稿を書くときには、その人たちの曲を聴きながら書くとインスピレーションが湧きやすい。noomはCDを含めた音源が一切ないから独自に録音しておいた。noomの発言も一字一句残せるように、という意味も込めてだ。

だがこれを聴きながら原稿を書くことはなかった。録音に失敗していたからだ。なんてつまらないミスをしたんだろう…次からはちゃんと確かめてから録ることにしよう。

そう決めてふと窓の外を見ると、初めてnoomと出会ったときのような、美しい満月が浮かんでいた。

song〜見えない月

時刻はもうすぐ午前1時。ブースの窓からは、右半分が欠けた下弦の月が見える。

豊霧市にあるラジオ局「FMみすと」。そこで私は金曜日の夜に番組を持っている。主に中学生、高校生向けに音楽のことや学生生活のことをテーマに話している。番組を持ってもうすぐ1年。平日は大学に通う2年生。ネタ探しや準備など大変だけど、毎回メールしてくれる固定リスナーも増えてきて、とてもやりがいがある。

「さあここでメールを1通紹介しましょう。ラジオネーム『ピンキー・リング』さんから」

たまにメールを送ってくれる女子高生の子だ。

「咲さんこんばんわ！来週、彼氏とライブデートすることになりました。『noom』っていう、豊霧市では有名なバンドのライブなんですけど、私は初めていくので、どういう人たちで、どういう曲を歌うのか教えてくれませんか？あと、新月の夜にしかライブをやるらないっていう噂は本当なんですか？咲さん、よろしくお願いします！」

noomか……すっかり有名になっちゃったね。

「というわけで、ちょこつとだけだけどnoomの紹介を。noomはボーカルのSAYOとギターのKIRITOからなる二人組のユニット。1年ほど前からライブハウス『deep mist』で活動を始めたんだけど、『ピンキー・リング』さんの言う通り、新月の夜にしかライブをやるらないということで神秘的な人気があるバンドですね」

新月の夜にしかライブをやるらない、か。厳密にはちょっと違うんだけどね。

「私も何回かnoomのライブには行ったことあってね、noomの音楽はバラードメインで、静かに聴かせるタイプの曲が多いかなでもボーカルのSAYOの声は包み込むように囁いて、時には突き刺さるように叫んで、というように曲ごとに違った声色で楽しめるし、KIRITOのギターはそれをしっかりサポートしていて、激しくはないけどしつかり響く、という感じかな」

二人の相性がこんなにもいいなんて、最初は思っていなかったけどね。

「残念ながら今ではライブハウスだけの活動ということでラジオなどで曲を流すことはできないんだけど、そのぶん貴重な経験だと思って、ライブデート楽しんできてくださいね」

音響担当の人に合図を出す。一曲流す合図だ。この曲はイントロがないから、最後に曲紹介すればいい。ヘッドフォンからディレクターの声が入ってくる。

「曲が4分27秒、終わったら曲紹介含めて12秒話してからCM入ります」

ふう、と一息つく。フルコーラス流しているときは、話し手にとっては貴重な休憩時間だ。

半年くらい前から、noomのことを書いてくるリスナーのメールが目立ってきた。それだけ、二人の音楽が響き渡っているということか。

本当にうれしく思う。私が引き合わせた二人が、こんなにもみんなに愛されているなんて。

私は思い出していた。沙夜といっしょにいた高校時代と、大学で霧人先輩と出会ったこと、そして二人を紹介したことを。

「私、大学には行かないから。バイトしながらボーカリストスクールに通って、いつかアーティストになるの」

学校の屋上で、私と沙夜は大の字になって空を見上げていた。どこまでも突き抜けるような、青空。

「それって……この前のオーディションで何かあったの？」

私は沙夜を横目で見ながら聞いてみた。沙夜のシヨートヘアが、静かに風になびいている。

「なーんもなかった。だから、今度は自分で何かを起こすために、レベル上げておくの」

沙夜はレコード会社主催のボーカルオーディションを受けていた。最終選考の一步手前まで行ったけど、そこでダメだったらしい。

「あ、ちよつとはあったかな。審査してくれた人があとで声かけてくれたの。しつかり練習すれば、もっとよくなるって。それからでも遅くはないって」

「でもボーカルスクールだったら、大学行きながらでもできるんじゃないの」

「大学は試験とかで余計な神経使いそうだから。そりゃバイトだっていろいろ大変だろうけど、スクール代も自分で出したいし」

もともと沙夜は頑固な性格だ。これ、と決めたら何があっても変えることなんてない。高校3年の秋にこんな話聞いたら先生たちは大変だろうな、と他人事のように心配していた。

「咲はそのままいくつもり？」

「うん、今の調子なら合格できそうだし」

「ふーん、じゃあ私たち、今度の春でお別れだね」

「別に引越すわけじゃないんだし。いつでも会えるじゃん。その間に私はラジオに出ること目指すから」

大学入ったら放送サークルに入って、ラジオで自分の声を届けたい……それが私の目標。テレビよりも人々の声を受け取りやすい、それでいて私の声を伝えやすい、そんなラジオというメディアの魅力に惹かれていた。

「そーだよな。あ、私がデビューしたら、咲のラジオに出させてよ。約束だよ」

咲が私の方に顔を向けて笑った。

「オーケー、約束」

私も笑い返した。秋の風がまた、やさしく沙夜の髪をなびかせた。沙夜は空を見上げ直した。

「今日は新月なんだって」

「え？」

沙夜はたまに突拍子もないことを言う。

「夜には地球の裏側に隠れちゃって、月が見えない日なんだって」

「中学の理科で習った気がする」

「でもさ、実は今の昼間にはさ、太陽のほうに月があるってことだよね」

沙夜は腕を高く上げて、太陽の方角に向かって指差した。

太陽、月、地球の順……これで夜になると、月は見えなくなるけど、確かに昼間は太陽の方向に月がある。太陽が眩しすぎて見えなだけで。

「うーんっと……あ、そうなるか」

「新月って私好きなの。今は目の前にいるのに見えないし、夜になつたと思つたら隠れちゃって見えないし」

私は太陽の光の前に月の輪郭を描きながら、沙夜の話聞いていた。

「いそいでいない、いないようである。恥ずかしがり屋だけど、いつもそばにいる。それにこれから輝いていくんだから、毎日楽しそう……私、そんな歌手になりたいの」

「……どんな歌手なの、それ」

「わかんない！」

「なに、それ」

私も沙夜も思いつきり笑った。雲一つないこの青空に、どこまでも突き抜けるように。

翌年の春。沙夜はバイトしながらボーカリストスクールに通い、私は

大学に通うことになった。

私は大学で放送サークルに入った。ラジオ局を見学させてもらったり、たまに先輩といっしょに「FMみすと」で番組を流してもらうこともあって、充実した大学生活だった。

一方沙夜の方もボーカルスクールでがんばっていたけど、すぐにオーディション、デビューというわけにもいかなかったらしい。しつかり実力付けてからオーディションを受けさせる、というのがその方針のようだった。

半年後。私のサークルに、見慣れない男の人が一人いた。話し方からすると年上らしいけど、半年間見たことは一度もなかった。その人が霧人先輩だった。

霧人先輩は1年間アメリカに留学していて、学年的には一つ上だった。向こうではバンドも作って、ギターをやっていたらしい。いろいろお話をしていると、日本でもバンドを続けたい、できれば女性ボーカルで組んでみたい、ということだった。

女性ボーカル……私は沙夜のことを思い浮かんでいた。霧人先輩の自作曲を聴いて、なんとなく合う気がしたからだ。私は思い切つて、二人を紹介することにした。

二週間後。私と沙夜は霧人先輩の家に行った。狭い部屋の中に音響機器が並んでいた。アメリカで買ったものとか、帰るときに向こうのバンドメンバーからのプレゼント品もあるらしい。

「じゃあ、まずは好きなように歌ってみて」

霧人先輩がヘッドフォンを耳につける。

「はい、よろしく願います」

沙夜がマイクに向かう。手には小さなノートを持っている。

沙夜が前もって聴いた霧人先輩の自作曲に、歌詞をつけてきて歌う……それが今日の課題だった。ノートには「new moon」と書いてあった。

” new moon いそいでいない 新月の夜
new moon いないようである 昼の新月
恥ずかしがり屋な お月様 まるで私みたい
でもこれから変わっていくんだから！
I can do anything!”

沙夜が歌い始めると、霧人先輩の表情がどんどん変わっていく。まるで子供のように目を輝かせて。曲が終わっても、霧人先輩の視線は沙夜から離れようとしなかった。

「あのー……先輩？」

「あ、ごめん、おつかれさま」

「どこか、ダメなところありましたか？」

沙夜は心配そうに霧人先輩を見た。

「いや、むしろ完璧だよ！僕の探していた声そのものだったから。沙夜ちゃんこそ、僕の曲はどうだった？歌いにくかったりしなかった？」

「いえ、全然。私の声に合わせてるといっつか、うまく乗せてくれるといっつか……」

「よかった！もうちょっと歌詞も音も詰める必要はあるけど、これならいっしょにやっていける気がする……いっしょにバンド組まなっか？」

「え、いいんですか？」

沙夜はうれしそうに顔をしていた。ボーカルスクールではなかなか大勢の前で歌うことがないらしく、徐々にわくわくする、という感じだった。

それからしばらくは霧人先輩の家で曲作りするという日が続いた。路上ライブでは人の足を止めるのが重要だということで、カバーをいくつか歌いこなすこともやっていたという。

そして初めての路上ライブの日。私も準備を手伝った。

「咲が私たちの初めてのお客さんだね」

「ありがとう。霧人先輩、沙夜をよろしくお願いしますね」

「ハハ。いやーしかし、初めてというのはいっつになっても緊張するなあ。アメリカじゃあ何十回もやったんだけどなあ」

「お願いしますよ霧人さん」

バンドメンバーなのに先輩と呼ばれるのは何かおかしい……そう言って霧人先輩は沙夜に対して先輩付けを禁止させたようだ。

「あー満月だ！」

沙夜が東にある満月を指差して声を上げた。

「うーん、ちよっと眩しいかな……」

「そうか、沙夜ちゃんは今月が好きなんだっけ。しまったなあ、日にち間違えちゃったかな」

「いいですよ全然。ちよっとしたライトアップみたいで」

「じゃあ、照明も点いたところで始めますか」

二人のデビューライブが始まった。なかなか道行く人の足を止めることは難しいけど、何人かは聴いてくれて、拍手してくれた人もいた。中には、同じように路上ライブしている人も声をかけてくれた。

数曲やったところで、私は別れることにした。ラジオの打ち合わせがあるからだ。

「ありがとうね、咲。自分の番組の打ち合わせなんだよね。ラジオがんばってね！」

「咲ちゃん、沙夜を紹介してくれてありがとう」

私も翌月から自分一人だけの番組を持つことが決まっていた。みんな、新しい道を見つけたようだった。

打ち合わせが終わると、沙夜から電話がかかってきた。

「ちよっとちよっと咲どうしょー。スカウトされちゃったんだけど

」

沙夜がものすごく興奮している。こんな沙夜は始めてた。霧人先輩が代わりに電話に出る。

「ライブハウスの『deep mist』って知ってる。あそこのオーナーが僕らのライブ聴いて、今度うちでライブしてみないかって言われちゃったんだよ。とりあえずはオープニングアクトで一曲だけなんだけど」

「すごい！いつなんですか？」

「二週間後。だからちょうど新月になるかな？」

咲の声が入ってくる。

「咲、後でチケット渡すから、絶対来てね。必ずだよ」

二週間後。ライブ当日。霧が濃い日だったのをよく覚えている。

沙夜と霧人先輩、いや二人はnoomというバンド名で、SAYOとKIRITOはステージの上に立っていた。「七等星」という私が初めて聴いた曲だった。初めて二人が出会ったときの曲「new moon」とは少し違った、どちらかというと閉鎖的な世界観だけど今日みたいな、月の無い夜に、霧が立ちこめるこの街でよく響く曲だった。観客全員が、二人の音に聞き惚れていた。私がこの二人のキューピット役だったと思うと、無性にうれしくなった。

ライブ終了後、私は二人に会いに行った。廊下で二人の後ろ姿を見つけたが、誰かと話しているようだった。沙夜の声が耳に入ってくる。

「私たちのライブ、今日みたいな新月の夜だけということでは無理ですか？他の日、他の場所では決してライブしないという条件で、お願いできませんか？」

私には、沙夜の言葉の意味が理解できなかつた。いろいろな言葉が聞こえてくる。プロ、CD、大きなステージ、事情、新月の夜には必ず来る……

男の人との話が終わると、二人は私に気づいたようだった。

「あ、咲、今日はありがとね。ステージからも見えたよ」

「ねえ……さっきの話って……」

霧人先輩が割って入ってくる。

「さっきの人、ここのオーナーなんだ。ちょっと無理なお願いしてたところ」

「あのね、聞いて咲。私たち、今日みたいな新月の夜にだけ、ここでライブすることにしたの」

「それ……どういふことなの」

沙夜は、なんだか悲しそうな顔つきだった。

「うまく説明しにくいんだけど……ちょっと事情ができちゃって。

新月の夜じゃないとダメみたいな、私たち」

「ダメみたいって……なにそれ」

「わかんない！わかんないんだけど……お願いわかって。たぶん、そのうち咲もわかってくれると思うの」

「信じてくれないかもしれないけど、僕ら次の新月の夜もここでライブやるから」

「お願い咲！次のライブも来て！そうすれば、分かってくれると思うの」

沙夜は頑固な性格だったのを思い出した。これ、と決めたら何があっても変えることなんてない。だったら、信じるしかないと思っ

た。

次の日、私はあることを知った。信じられなかった。だけど、沙夜のことは信じようと思った。

そして次の新月の夜、沙夜と霧人先輩はnomとして、SAYOとKIRITOとして「deep mist」のステージに立っていた。信じられなかったけど、信じることにした。

「10秒前！」

ディレクターからの声がヘッドフォン越しに入ってきた。休憩は

終わりだ。番組はあと30分。もう一仕事しないと。

「お送りしたのは、こちらも月に由来をもつアーティストの曲です。
moon^{ムーン}moonで『青い月とアンビバレンスな愛』でした。『ピン
キー・リング』さん、noomのライブデート楽しんできてくださ
いね」

沙夜、聞いているかな？私の夢はかなったよ。沙夜の曲はラジオの
電波にのせて流すことはできないけど、こうしていっぱい紹介する
よ。

CMの間、ふとブースの外に視線を動かした。窓から見える下弦
の月は先ほどよりもぼやけて見えた。少し霧が出てきたのだろうか。
私は思わず笑みを浮かべてしまった。

song 〱 歌い続ける理由

あ、この二人ーせっかくのライブデートは、憂鬱な時間に変わった。

「明日香、noomのライブに行かない？」

翼からそう誘われたのは、10日ほど前の朝。高校へ行く途中。西には満月より少し欠けた、白い月が浮かんでいた。

「noomってアレでしょ？新月の夜にライブやるって……」

「そうそう、また行きたいな」なんて思って

「あれからすっかりハマったんだ？」

1ヶ月ほど前。翼はバンドメンバーと喧嘩したけど、noomのライブに行つて、noomみたいな音楽をやりたいということと仲直りしていた。確かあのときは他のメンバーから、うまくライブに行かせるように交渉役を頼まれた気がする。結果大成功だからよかったと思う。

「いいよ、翼くんの目標の音楽つてやつ聞いてみたいし」

noomのことは翼からよく聞いていた。翼が興奮気味に話すのを聞くのは私にとっても楽しかったし、私もライブそのものは好きだから、行くのを楽しみにしていた。

うれしかったから、ラジオの深夜番組にもメールして読んでもらった。「ライブデート楽しんでくださいね」と言われて、恥ずかしくなって一人で夜中笑ってしまった。

ライブ当日。金曜日だったから、制服のままいる立ち寄った後、ライブハウス「deep mist」へと行った。うっすらと霧が出てきた。

薄暗い会場の中を前のほうに進んで行く。翼の話によると、トウクのときに会話できるチャンスがあるらしい。翼は張り切っていたけど、なんだか私は気分が乗らなくなっていた。今朝も少し風邪気味だったし、体調を少し崩したのかもしれない。

やがてほとんどの照明が消え、一瞬真っ暗になった。そしてステージを、ほんのわずかな明かりが照らす。

そこにシルエットが二つ現れた。一人はマイクスタンドの前に立って、もう一人は、ギターを持って座っていた。

観客から拍手が起こる。この二人が、noom。

少しの静寂の後、KIRIITOのギターが奏でられた。そして、SAYOの声が、マイクを通じてスピーカーから流れる。マイクを通じて……

「え？」

私は思わず声を上げてしまった。隣で翼が驚いたようにこっちを見ている。

「どうしたの？」

翼はきつと私のことを心配しているだろうけど、私は翼よりもnoomの方に視線が集中していた。

noomの二人をよく見てみる。

ボーカルのSAYO。細い体にショートヘア。顔は暗くてよく分からないけど、たぶん私より二つか三つくらい上。

ギターのKIRIITOは長めの髪。体つきは普通より少しいいくらい。やっぱり顔は暗くてよく見えない。

二人の奏でる音。目を閉じて聴いてみる。耳から入るといっても、心に響くというほうが正確だ。翼もそんなことを言うたけど、この音は……

「あ、この二人……」

無意識のうちに声を出してしまったようだ。翼が肩をたたいて聞いてくる。

「明日香、どうかした？noomの二人がなんだって？」

「あ、ごめん……大丈夫。いい曲だね、心の中で響くみたいで」
「そうそう、それが僕の目指す音楽なんだよ」
そう言って、翼はステージに目を向けた。

心の中に響く音。

新月の夜のライブ。

素顔は誰も知らない。

ラジオで曲は流さない。

……そうだったんだ。それが、noomの正体。

何曲か演奏した後、SAYOが観客からの質問に答え始めた。翼も指名されたという、質問コーナーだ。

「それじゃあ最後に……その制服を着た女の子！」

SAYOは私を指差していた。

「隣にいる男の子は前回のライブで確か質問してくれたよね？」

翼は照れくさそう、はい、そうです、と笑いながら答えた。

「いつしよにいるってことは制服デートかな？うらやましいなあ、青春だね」

観客から笑いが聞こえてくる。KIRITOがつつこみを入れてくる。

「あれ、SAYOは制服デートの経験はないの？」

「あー……今は質問タイムだから、さ、さ、何か聞きたいことある？」

なんでもいいよ、と隣で翼が話しかけてくる。

悪いけど、聞きたいことはこれしかない。SAYOとKIRITOの目をしっかりと見据えて、こう切り出した。

「どうしてあなたたちは、ここで歌い続けているの？」ここでずっと、歌い続けていくつもりなの？」

二人の表情が明らかに変わった。質問の意味が理解できないじゃない。核心を突いているからだ。

翼もきよとんとした顔をしているに違いない。だけど、今はnomの二人を見つめるしかない。

SAYOとKIRITOはしばらくお互いを見つめてから、SAYOが答えた。

「ねえ、あなたの名前は？」

「白崎明日香です」

「そう……いい名前ね。私たちと違って明日があるんだ」

「ということは、やっぱり……」

「質問の答えね。私たちが初めてライブしようとした場所がここだった。これでいい？」

沙夜はやさしく微笑んだ。なんだか申し訳ないことをしているように気が滅入る。

「これからも続けるんですか？」

「……わからない」

「わからない？」

意外な答えに、私は戸惑ってしまった。

「ずっと続けていくつもりだった。こうしてみんなに、私たちの曲を聴いてもらうのが、私たちの夢だったから。月の無い夜、霧が立ちこめるこの街で、いつまでも永遠に響き渡るようにね。だけど……

…今、あなたの名前聞いて、考えてるの」

「私の……名前？」

観客がざわめき始めている。きっと、私とnomにしか分からない会話だからだろう。

「あなたは明日に向かって生きているの。そんなあなたを私たちが引き止めるのって……あまりよくないことなのかな、て」

「引き止める？」

「人生って、毎日が変わるからおもしろいでしょ？今日と違う明日

があるから楽しい……やっぱり、同じところに立っているよりも、変わっていくほうが自然なのかな、て」

「そうですか……わかりました。あとはお二人の考えに任せます」

「ありがとう。これからも彼氏とのデート楽しんでね」

「ありがとうございます」

SAYOが笑いかけてくれたので、私も笑い返した。隣で、どういう表情をしたらいいのか分からない翼が立っていた。

ライブ終了後、私と翼はコーヒーショップに入った。翼が誘ってくれたから……というよりも、聞きたいことが山ほどあるからだろう。

「あの会話、どういう意味なんだ？」

「どつって、まあ、そのままの意味なんだけど」

「いやいや、全然わからない。最初から様子が変わったけど、何か関係あるのか？」

私は正直迷った。noomの二人がどういう決断をするのかわからないし、そもそも説明していいことなのか。

「明日香、僕は先月、ライブに行くように説得してくれて、本当に感謝している。だから、明日香の言うことは信じるから、教えてくれ」

SAYOはこれからもデートを楽しんでね、と言ってくれた。「これからも」ということは、明日に向かってーそういう意味なのか。

ここで私が話さなかったら、何も変わらないかもしれない。このままnoomは豊霧市のカリスマアーティストとして、その音楽を響き続けていくかもしれない。

だけど多分、それはもうnoomの本意ではないと思った。私も、翼も、そしてnoom自身も、月の無い夜、霧が立ちこめるこの街で留まっていけないんだ。変わらないといけない。

「じゃあ、話すね。信じてもらえないかもしれないけど……」
翼は真剣に聞いてくれた。外の霧は、少し薄らいでなっているよ
うだった。

song / noomが生まれた日

「天川さんですね、朝倉です。どうぞ、こちらに」

私は小さな打ち合わせ室に案内された。

地域雑誌を発行している、豊霧市の出版社。そこで、ある記事を書いた人と話をする約束になっていた。

私がnoomのライブを視察してから1ヶ月半が過ぎていた。会社にはメジャーデビューさせる器ではない、という適当な報告書で済ませていたが、ライブを撮影した映像がどうしても気になっていた。

そのうち、noomのことを教えてくれた豊霧市の友達から、また情報が入った。noomのことを特集した雑誌があること、ラジオでnoomのことを紹介している人がいた、というものだった。そしてまずは、noomの特集を書いた雑誌の担当者に会いに行くことにした。

「天川さんはレコード会社の方ですよ。プロの目から見て、noomはどうでしたか？」

朝倉はプライベートでバンドもやっているという。単純に、他のバンドの評価が知りたいのだろう。

「素晴らしかったです。ただそれをメディアで流すと逆に伝わらない、とも感じました。なのでスカウトは諦めました。惜しい逸材です」

「なるほど。では諦めたのに、どうして僕のところ？」

私はバッグから雑誌を取り出し、付箋が貼ってあるページを開いた。noomを特集した記事だ。

「これは朝倉さんが書かれたものですよ」

「ええ、そうです」

「ごういうものって、本人たちに原稿を見せるものなんですか？」

「ああ、今回はライブハウスのオーナーの有明さんという方に確認してもらいました」

有明……私のおときも対応してくれた人か。なら、話が早いかもしれない。

「そのときに変更が入ったりしませんでしたか？」

朝倉の顔つきが変わった。ヒットしたかもしれない。

「変更……といますと？」

「もともと朝倉さんの書いた原稿を書き換えるように言われたとか特にnoomの素顔の部分について」

朝倉は一息ついた。そして逆に聞き返してきた。

「一つお聞かせください。このことは天川さん、いや、レコード会社として何か考えがあつてのことですか？」

「いえ、あくまで一個人の興味であつて、仕事ではありません。今日は有給もらつてますから」

仕事で出張となると報告書を書かないといけない。それは面倒だ。なるほど。天川さんもnoomの魅力に惹かれたということなんですね

魅力というよりも、あの映像に写っていた秘密に、だが。

「いいでしょう。カットされたところはありました。実は僕、noomが一度だけ路上ライブをやったときに偶然聴いたことがあるんです。その部分です」

「路上ライブ？」

「ええ、一度だけですけど。そのときに、ライブハウスのオーナーの有明さんが見つけてスカウトしたらしいです」

「どうしてそこがカットになったんですか？」

「正直僕にもわかりません。ただ路上ライブのときの音楽性や声は、今と違つてもつとアップテンポで、開放感のある曲でした。路上ライブからライブハウスデビューまでは約二週間あつたんですけど、その間に何かあつたのではないかと僕は思っています」

「何か……と言いますと？」

「これもわかりません。ただ音楽やってる人間にはわかるんですけど、あれほど音楽性を変化させたとなると、何か大きなきっかけがあるはずなんです。それを……有明さんは多分、隠してるんです」

「やっぱり、有明は全て知っている、ということか。」

「路上ライブのときの音源はあったりしませんか？」

「いや、あのときは本当にたまたま通りががっただけなので……」
音楽性の違い、というのを確認してみたかったが、それは無理だった。ところが朝倉は思いがけない言葉を言った。

「noomの音源は全くないんですね。この前の取材でもこっそり録音したんですけど失敗しましてね」

「えー!？」

「あ、いや、オーナーからは禁止されてたんですけど、やっぱり仕事上必要だと思ひまして。単純なミスをしてしまいましたね」

「どういうミスですか」

「どうしてこんなことにつっこむんだろう、朝倉は不思議に思っているに違いない。だけどこれは重要なことだ。」

「録音レベルが小さかったんですよ。そのせいで観客の声は録れてるのに、肝心のnoomの音が録れなかったっていう……」

「そうか……やっぱりそうか。」

「一つ確信を持ったところで帰ろうとしたところ、朝倉から一声かけられた。」

「そういえばご存知ですか、noomは次の新月でラストライブらしいんですよ」

「え、どうしてですか？」

「それもわかりません、と朝倉は答えた。」

次は「FMみすと」で番組を持っている東野 咲という女子大生に会う約束になっている。

少し時間があつたため、ライブハウスのオーナーである有明に電話した。やはり、少しけだるそうな口調だった。

「noomが次で最後のライブにするとお聞きしましたが、どうしてでしょうか」

「本人たちの希望ですよ、私も驚きましたかね」

私は思い切つて質問してみた。

「失礼を承知でお聞きます。noomについて隠していることがありますよね。教えていただけませんか？」

しばらくの沈黙の後、耳に入ったきたのは、明らかに苛立った声だった。

「それを言う必要はない。どうせ最後になるんだ。どうでもいいのではないですか」

はやり隠し通すつもりらしい。

……仕方ない、切り札を出すか。

「実は……先月のライブ視察の際、申し訳ないと思いましたが映像を撮らせていただきました。そうしたら……」

ブツツという音が耳に響いた。電話は切れてしまった。

「FMみすと」は小規模FM局とあつて、スタジオ3つと事務所、そして会議室が数える程度の大きさだった。その小さな会議室で待たされていると、しばらくして東野が入ってきた。私も豊霧市出身だと聞くと親しみを持ったのだろうか、地元の話でしばし盛り上がりつつしまった。

「ところで、本日お伺いしたのは、noomのことについてです。以前東野さんが番組で紹介したそうですね」

「ええ、私もファンなんですよ」

「noomの素顔について何かご存知なことはありませんか」

「……天川さんは、noomのことはどう感じましたか」

「非常に繊細だと思いました。声とメロディーの相性がこの上ない

です。ただ、メディアで流すと返って印象が薄らいでしまう、とも感じました。それほど、ライブで際立つ声でした」

「そうですか……2年前よりも成長していたんですね」

「2年前？」

「覚えていらつしやいませんか。SAYOは2年前オーディションを受けて、天川さんからアドバイスを受けたって言っていましたよ」

「わたし、から？」

「これがSAYOです。見覚えありませんか？」

東野はバッグの中から写真を1枚取り出した。そこにはシヨートヘアの、はじめた笑顔が印象的な女の子が写っていた。いや、私にとってもっと印象的だったのは、その歌声だった。

思い出した。2年前、レコード会社主催のオーディションで、私は最終選考の1つ前に審査員として参加していた。彼女は高校3年生だったはずだ。今すぐのデビューは無理だが、しつかりとした練習を積み重ねれば存在感のある逸材になる、確かそうアドバイスした。

彼女の名前は覚えている。いつかまた、オーディションで出会えたときのために。彼女の名前は。

「川瀬……沙夜。彼女が、noomのSAYO？」

「そうです。沙夜から天川さんの名前を聞いてました。すごいいい人だったって」

「そうだったんですか……その後、彼女は練習を？」

「ええ、大学行くのをやめて、バイトしながらボーカリストスクールに通ってました。それから、私がKIRITO先輩を紹介しました」

「え？」

「これが先輩の写真です。サークルの集合写真ですけど」
そういつて彼女は2枚目の写真を見せてくれた。15人くらいの人たちの中に、あの日ライブで見たギタリストは確かにいた。彼は青木霧人というらしい。さわやかな笑顔をしていた。

「アメリカへ留学してるときにバンドをやってて、日本に戻ってか

ら女性ボーカルといっしょに音楽やりたいと言っていたので、それで私が沙夜を紹介しました」

もう一度一枚目の写真を見る。川瀬沙夜の無邪気な姿。そして、青木霧人のすつきりとした笑顔。

これが、あのnoomの二人。

「私が引き合わせた二人が、こうしてレコード会社の人の目に留まるのは本当にうれしいです。特に沙夜は本気でアーティストを目指していたので、約束を果たすことができたようで」

「約束？」

「あ、これは個人的な話なんですけどね。私はラジオで番組を持つ、そして沙夜は歌手になって、私の番組に出るっていう、高校生の他愛もない口約束でしたけどね」

東野は昔を思い出しているかのように、少し上を見つめながら話した。

「沙夜さんは、今後東野さんの番組に出るつもりはないのですか？」

「……一つ、お聞きしてもいいですか？」

突然、東野は口調を変えた。これまでの自慢げに話す様子から、一転して慎重な面持ちになった。

「天川さんはレコード会社の方ですよ。noomのライブでは、録音とかしたのですか？」

「ええ、ライブハウスのオーナーからは禁止されてたんですけど、仕事のこともあるので。ビデオカメラで撮影しました」

「映っていましたか？」

「え……」

不意を突かれた。彼女はそこまで、全て知っているのか。

「映っていましたか？」

「それは……」

「映ってなかったんですね」

「noomの二人は、映ってなかったんですね」

そう、あの映像に、noomの姿はどこにもなかった。

ライブから帰ったあの日、家でライブの様子をもう一度見ようとビデオカメラの映像を見たところ、信じられない光景が記録されていた。

noomの声や音は一切入っていなかった。観客の声や他の音は入っていたのに、だ。

それだけではない。二人がいるはずのステージには誰も立っていなかった。さながら、観客がリアクションのリハーサルをしているかの光景だった。

まるで、noomという存在は最初からなかったかのように。

「どうして……それを知ってるんですか？」

「天川さんは、noomの素顔を知りたいということで、私に連絡を下さったんですね」

「……はい」

「天川さんは沙夜の才能を見抜いて、沙夜の人生を大きく変えた方ですから、沙夜のことを知ってもらう必要があると思っています」

「沙夜さんの、こと……？」

「それに、noomのライブは次で最後です。沙夜も霧人先輩も覚悟を決めたんだと私は思っています」

「覚悟って……」

「これが、noomの素顔です」

東野はバッグの中から、今度は切り抜いた新聞のコピーを見せた。それは交通事故の記事だった。日付は一年ほど前のものだった。

見出しには「タクシー事故 運転手と乗客3名死亡」。亡くなったのは、タクシー運転手、そして、

青木霧人

川瀬沙夜

「事故は、二人がライブハウスへ行く途中のことでした。初めてステージに立つ、新月の夜のことでした」

東野はうつむいて、喉の奥から振り絞るような声で言った。

それは二人が死んだ日であり、noomが生まれた日でもあった。

song) 見えないけど、確かに存在している月

「noomの二人は、もう死んでいるの。幽霊となって、ああしてライブを続けているの」

一ヶ月前、僕は明日香をnoomのライブに誘った。そして明日香から、信じられない話を聞かされた。noomの二人は幽霊だ、と。

明日香は昔から靈感が強かったらしい。僕も初めて聞いた話だった。あまり気味悪く思われるのが嫌で、友達にもほとんど話してなかったという。

明日香はすぐに、二人の正体を見抜いていた。そしてSAYOに聞いた。そうして歌い続けているのか、と。

あの夜ライブが終わった後で、明日香から二人のことについて教えてくれた。

「SAYOが、初めてライブをしようとした場所があこのライブハウスだった、と言ってたでしょ。たぶん、当日にライブハウスに行く途中で、二人とも亡くなっただんだと思う」

「それが、もしかして新月の夜？」

「たぶん」

「それが、新月の夜にしかライブをやらない理由ってことなのか？」

「厳密に言つと『やらない』じゃなくて、新月の夜にしか『できない』だと思つの」

「どういうこと？」

「私ね、今までいろんな霊を見てきたんだけど……人によって、特別な日に思い入れがあると、その日しか現れることができなくなるみたい」

「特別な日……」

「それが新月の夜。noomの二人が、新月についてなにか強い思

いがあったんじゃないかな。それで、新月の夜にしか活動できないんだと思う」

新月の夜にしか現れない幽霊……noomの二人は普段何をしているのかは全くの謎だったが、確かにこれなら納得がいく。だが、そもそも幽霊だというのをすぐに受け入れることはできなかった。ただ明日香が言っていることだ、信じるしかない。

その次の日、僕と明日香は図書館に行った。過去の新聞を調べるためだった。

noomの二人が同時に死んだとなると、何かの事故に巻き込まれた可能性が高い。あらかじめ新月となる日付は調べてある。次の日の新聞を見ればいい。

「あつた！翼くん、あつたよ」

明日香がその記事を見つけた。今から一年ほど前のものだった。

「タクシー事故 運転手と乗客3名死亡」という見出しで、死亡したのはタクシー運転手の増川洋介（53）、乗客の青木霧人（20）、川瀬沙夜（19）とあつた。

「KIRITOと、SAYO……」

僕は呆然としていた。初めて知ったnoomの素顔が、交通事故の死亡記事……

「きつと、ライブハウスに行く途中だったんだろうね。初めてのステージだったのに……」

明日香は、目に少し涙を浮かべながら話していた。

「どうしてもステージに立ちたくて、だから幽霊となって駆けつけて、ああしてライブを続けていたんだ……」

僕は新聞記事を見つめていた。濃霧による視界不良と、運転手の体調不良が原因だという。濃霧……noom。それも名前の由来だったのか。

明日香が口を開いた。

「あの歌声もギターも、マイクやスピーカーを通じて流してるんじゃないの。私たちの心に直接響かせているの」

幽霊の声や姿はCDや映像に残せないということらしい。ああそうか、だからCDデビューやテレビ出演の話を断っているのか。

しばらくして、明日香に聞いてみた。

「なあ、幽霊って、いつまでも居続けるものなの？」

明日香は涙をぬぐいながら答えた。

「いつまでも、てことはないと思う。この世に飽きて自然消滅することもあるし、あとは……」

「あとは？」

「自分たちがこの世に残る理由がなくなったとき。願いがなかったりとか」

「願い？でもそれって、ライブハウスに行つてステージに立つことだけじゃないの？」

「うん、だから聞いたの、『ずっと歌い続けるの？』って」

そうだ、明日香はSAYOにその質問をしていた。

「二人の願いは、たぶん、自分たちの曲をずっと聴いてもらうこと。路上ライブで、行き交う人たちの足を止めて聴いてもらうように。」

二人は……観客に立ち止まってほしいの、いつまでも。自分たちの曲を聴いてもらうように」

「立ち止まる……？」

「そう、離れてほしくないって思っている。だけど、昨日の私との話で迷ってるかもしれない。やはり、いつまでもいっしょにはいられないって」

「それが、昨日の会話、か……」

「驚かせてごめんね。あとは二人に任せるしかないよ。幽霊にだって、自分たちで決めなきゃいけないことがあるんだから」

noomが、次をラストライブにすると知ったのは二週間ほどし

てからだった。やはり、明日香の言葉がnoomの心を動かしたの
だろうか。

そして、ラストライブの日。特に霧が濃い日だった。当然、僕と
明日香は参加した。

会場は、ライブ開始前にも関わらず、異様な雰囲気か漂っていた。
もともと、ステージだけがぼんやりと照らされるライブで、それこ
そ時間が止まっているかのような空気だったが、今夜はわずかに空
気が揺れているーそんな雰囲気だった。

時間になつて、一瞬ライトが消えて真っ暗になった。そして再び
ライトが照らされたとき、そこに二人はいた。

SAYOとKIRITO。幽霊となつてライブを続けるnoom。
一曲目は代表曲「七等星」だった。目では見ることでできない暗
い星。見えないけれど、心の中で光り続けたい、だから目を閉じて
ー今思うと、正にnoomそのものだ。この場所では自分たち
は輝くことができない、だからここに立ち止まって、いつまでも自
分たちの音を聴いてほしいーそんな意味があつたのか。

途中で、SAYOのMCが入った。SAYOは悲しげな顔をしな
がら、今日のラストライブの意味について語った。

「今日のライブで最後にしようと思つたのは、みんなにここから離
れていつてほしいからなの」

観客は静寂に包まれていた。動揺しているはずなのに、声を出す
ことができないような雰囲気か包まれていた。

「私とKIRITOはちょっとした事情があつて、新月の夜に、こ
こでしかライブをすることができないの。それで、少しでもみんな
に立ち止まってもらいたかつたの。私たちがここから動けないから
ね。新月の夜だけなのに、みんなここに立ち止まって来て、私た
ちうれしかった。ずっと続けたいと思つてた。私たちの音楽は、い
つまでも永遠に響き渡るんだつて。でもね……」

SAYOは一息入れてから、一瞬僕の方を見た。いや、たぶん隣

にいた明日香を見つけたんだろ。

「やっぱり永遠なんてないんだな、て思い始めたの。今日だって、あと10時間もすれば朝がやってくるんだし、月だって満月に向かって太つちよになっていくんだよね。永遠ってことは変わらないこと。それって、生きてることになるのかなって」

SAYOの言葉が詰まってきているように見える。KIRIITOが優しくサポートに入る。

「僕は昔アメリカに留学していて、毎日が全然違ってとても楽しかった。日本に帰ったら今度はSAYOっていう子にあって、また違った日を過ごすようになったんだ。それは本当に楽しかった。生きてるって実感があつた」

SAYOは下を向きながら、恥ずかしそうに笑っているようだった。

「なんか照れちゃうな。私もKIRIITOと練習するときはずっとも楽しかった。私生きてるっていう感じしてたの。でもね、今は…：なんていうのかな、楽しいと言えば楽しいんだけど、いつも同じ場所で、同じ曲しかやらないし…：なんかしっくりこないの。それで、みんなと直接お話をして、少しでも変化を持たせようと思ったの」

「てことは、結局僕らは変化を楽しんでたってことか」

「アハハ、そうだね、おかしいよね」。みんなには変わらない音を聴いてほしいのに、自分たちは変化を望んでるってね…：そう、それに気づいたんだよね」

徐々に照明が明るくなっていく。今までのnoomのライブにはない演出だ。

「みんなには変わってほしいと思ってる。毎日が違う、変化のある日々を過ごして、生きてるって実感を味わってほしいの。だからここで立ち止まってもらうのは今日で終わり。ここから離れて、また違う日々を過ごしてほしいの」

ステージが明るくライトアップされた。二人の優しい顔がはつき

りに見える。これが二人の素顔……

「もちろん変化って楽しいのと同時に不安だと思っの。そういうときは、私たちのことを思い出してほしいね。新月は見えないけど、地球の裏側にはいつもいるし、昼間には太陽の前に行ってるってこと。だから、みんなは自分好きなところに行行ってきてね。いつでも私たちはそばにいるから」

SAYOはKIRIITOに目配せをする。KIRIITOはギターを持って構える。

「そんな感じで、最後の曲にしたいと思います。ここでは初めてやる曲です。そういう意味でも、変化を楽しんでいってほしいな、て思います」

KIRIITOがチューニングを始める。

「この曲は、新月を歌ったものなの。見えないけどそばにいる恥ずかしがり屋。でもこれから満月にどんどん輝いていくの。そんな毎日ってきつと楽しいんだろつな、て思っ作っった曲です。では聴いてください。『new moon』」

月が見えなくなってもいいじゃない 「寂しい」なんて言わないでよ

behind you 君の後ろにいるんだから

ねえねえ 心配することないって！

太陽が輝いててもいいじゃない 「眩しい」なんて言わないでよ
front of you 君の前にいるんだから
さあさあ いっしょにいこうよ！

dark or bright?

どっちだっついていいじゃない！

私は私なんだから

new moon いそいでいない 新月の夜
new moon いないようである 昼の新月
恥ずかしがり屋な お月様 まるで私みたい
でもこれから変わっていくんだから！
I can do anything!

満月じゃなくなつていいじゃない 「見えない」なんて言わな
いでよ

new to full 君の前に現れるから
そうそう 今すぐ輝くから！

new or full moon?
どっちだつていいじゃない！
変わっていくものだから

new moon 終わりを告げた 新月の夜
new moon 新たに始まる 昼の新月
これから満ちていく お月様 まるで私みたい
これからも変わっていくんだから！
I can do anything!

new moon night 目を閉じてごらんよ 君の後
ろにいるよ
new moon day 手をかざしてごらんよ 君の前に
いるよ

いつもそばにいるから さあ君も
change yourself
because you can do anything!

new moon いそいでいない 新月の夜
new moon いないようである 昼の新月
恥ずかしがり屋な お月様 まるで私みたい
でもこれから変わっていくんだから！
だからあなたも変わっていきこうよ！
I can do anything
so you can do anything!

今までのnoomのライブでは聴いたことない、アップテンポな曲だった。でも違和感は全くなかった。それがnoomの伝えたいことだったから。

曲が終わり、観客からは拍手が鳴り止まなかった。やがてステージがライトダウンされていく。noomの二人の声が聞こえた。小さい声だったけど、はっきりと。

「さようなら、そして、ありがとう」
ステージの照明は完全に消え、そこにnoomの姿はどこにもなかった。

僕と明日香は、ライブハウスから外に出た。ライブ前は濃い霧だったのに、すっかり晴れて星空が見えていた。

「いつちゃったね、SAYOさんとKIRITOさん」
明日香が夜空を見上げながらつぶやいた。目元はうつすらと涙が見えていた。

「ごめんね。好きな音楽、もう聴けなくなっちゃって」
明日香は申し訳なさそうに言った。

「そんなことはないよ。あのままだったら、僕はいつまでも通い続けたと思う。それじゃあ、noomのような音楽は出来ないよ」

明日香は意外そうな顔で僕を見た。

「noomの音楽をコピーしようとも思ったけど、それじゃっぱ

り何も変わらない。noomとはまた違った、僕なりの音楽を作っていくよ。毎日楽しくね」

明日香は優しく微笑んでくれた。

今夜は新月。もちろん、月はどこを探しても見つからない。

僕は目を閉じて、一息を吸った。ひんやりとした空気が体の中に入ってくる。

意識を足下に、そしてさらにその下に伝わらせる。

そしてこの地球の裏側に、見えないけれど確かに存在している月の姿を思い浮かべていた。

(了)

私は学校の屋上で、大の字になって空を仰いでいた。空には雲一つない。太陽だけが輝いていた。自己主張が過ぎるくらいに。

秋の風が、私の髪をなびかせる。

あたたなにかいなくなつて関係ないよと言わんばかりに、どこまでも駆け抜けるように。

一週間前まで、私はレコード会社のボーカルオーディションを受けていた。正直、自信はあった。最終選考の一つ前の試験が一週間前。そこで私は落ちた。

選ばれるのは一部の人だけ、なんて頭では分かっている。だけど、改めて自分が否定されたみたいで、別に私なんか生きてなくてもいいんじゃないの、なんて思ってしまったほどだった。そこらへんにいる、フツートの女子高生。いや、そもそも気にも留めない、視界にすら入らない存在。自分がそんな風に思えてきた。

だけど昨日、レコード会社の人から電話があった。この前の選考で審査をしていた人だった。もしかしたら…という淡い期待を抱いていたけど、別に復活当選、なんていう都合のいい話ではなかった。ただ聞きたいことがある、ということだった。

「面接で『どんな形の月が好き?』て聞いたよね?」

「はい」

「時間がなくて詳しい話が聞けなかつたんだけど…どうしてあの答えなのかな、て気になって」

その人の話によると、その質問にはほとんどの人が満月か三日月と答えるという。満月は一番輝いているから、三日月は笑顔のときの口に似ているから、だそうだ。

だけど私は迷いなくこう答えた。新月です、と。

新月の夜には、月は地球の裏に隠れていて決して見えない。ぐるっと地球が回ってやっと見えると思っただら、今度は太陽が眩しすぎて見えない。いそうでない、いないようである。恥ずかしがり屋だけど、いつもそばにいる。そんな姿が愛くるしい。それに、これから満月に向かってどんどん太つちよになっっていく、そんな変化ある毎日は絶対楽しそう……だから私は、新月が好きだ。

そんな風に説明したら、電話越しにレコード会社の人はこう言うてくれた。

「あなたの声はね、今すぐにはまた力不足。だけど練習すれば必ず存在感ある声になる。だから全力で自分を磨いて。新月がこれから輝いていくように、あなたも成長するから」

また秋の風が、私の髪をなびかせた。

あんなにかいなくなつて関係ないよ、だつて？
確かに今はそうかもかもしれない。でもいつか、私は大きな存在になつて、みんなの心に風をなびかせたい、私の声で。

そうだ、今日は新月だ。見えないけど、この昼間にだつて、目の前に月がいるじゃないか。

夜になつたら隠れちゃつてまた見えない。まるで世間から見たらどうでもいい私みたい。

だけど新月は、これから輝いていくんだ。

少しずつ、けれど確実に。

だつたら私だつて、これから輝いていつてみせる。

私は新月なんだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9331f/>

月の無い夜に

2010年10月28日07時36分発行